

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.141

多摩風土記（百草城）

百草園の地に、鎌倉時代真慈悲寺という大寺院が存在したことが明らかになってきている。近年百草園一帯の塁壕遺構の存在が指摘され、城蹟として認識されてきた。東京都教育委員会編『東京都の中世城館』は、真慈悲寺の堂跡等を活かし、享徳四年の第一次立河原合戦や、永正元年の第二次立河原合戦等に備え築城したのではないかとする。（健介）



ぶらつと小平霊園

— 富安風生・富沢赤黄男を訪ねて

石橋いろり

多摩地区の吟行会はコロナ禍でなかなか実現できず、昨年の小金井の滄浪泉園とはけの道の吟行も今年五月に先送りとなった。吟行地としては、四十名程の椅子席のある句会場が近くにあるのが必須条件だ。ただ一人吟行・プチ吟行であれば、お薦めしたい場所はいくつかある。小平霊園がその一つ。

一 小平霊園とは

自粛中に拠り所となったのが、小平霊園への墓参だった。コロナ禍で人と会えない閉塞感を多少なりとも払拭できた気がする。そこは、春秋の彼岸や盆と正月を除けば閑静でいい散歩

コースだ。小平霊園は、戦後、公営墓地不足を受け、昭和三十一年に開園。広さは東京ドーム一四個分（現在、広域避難場所）。西武線小平駅に隣接して造られた。駅から正門への表参道には、昔ながらの瓦屋根の石屋が残り、櫓並木が続く。石屋の軒先には屋号入りの手桶に供花が整然と並び、偶に香が漂う。貸し自転車も数台置かれている。

園内には、赤松を始め、榎、桜、檜などの大樹が茂り、夾竹桃、百日紅などの花木が植えられ、四季を通じて草花が彩る。冬は松の雪吊りや菰巻きがお目見えする。しかし、最近の公園では巻かない傾向にあるという。害虫駆除用に巻かれた菰を春先解いてみると、害虫マツカレハの幼虫はなく益虫ばかりがいたという結果を受け、皇居外苑や京都御所では二十年程前から菰は巻いてないようだ。だが、大名庭園の風情に魅かれてしまう。

木陰にはベンチが此処彼処に置かれている。寄付を都の建設局が募って、『思い出ベンチ』として設置している。因みにこのベンチは都の他の公園にも置かれ、一基一五万円程で、好きな言葉（四十文字以内）を刻印してくれるそう。お気持ちと懐の

温かい方は、御句を添えてどうぞ。

一般墓地の場合、広区画の墓が利用されなくなると、その区画は細分化して再販売されていく。それを見るにつけ、終の栖も此岸の住宅販売事情に似ていると苦笑してしまう。墓地の形は時代の世相により変容してきている。開園当初は公平の立場から芝生墓地が生まれ、その後「壁」、「合葬式」、「樹林」、「樹木」が設けられた。今は、墓を持たないことも選択肢の一つとなってきた。開園・閉園時間が夏と冬で変わる。春分の日・秋分の日を境に変わるところが、霊園らしい。

二 文化人眠る

この地には昭和史に名を遺す文化人や実業家が多く埋葬されている。事務所に置かれた園内マップにその詳細がある。十年程前から「墓マイラー」なる言葉も生まれたようで、著名人の墓地を巡ってお参りする人々を指すらしい。

有吉佐和子、壺井栄、伊藤整、徳田秋声、野口雨情、宮本百合子、小川未明他、マップには掲載されていないが日野原重明医師も。公表していないのはマップ製作以降に逝去されたか、遺されたご遺族のお気持ちもあるだろう。また、個人情報保護の捉え方の変化もあるだろう。日野原医師の事は、句集『10月4日104歳104句』の中に「妻静子小平墓地にて我招く」という納骨の日に詠まれたという句があり知り得たのだ。日野原医師は俳人金子兜太師との対談を通じて、共著の『たつぷり生きる 卒寿の俳人と白寿のドクター』を出版。九八歳から俳句を始め、当初兜太師が指南されたいらしい。俳人としては、富安風生、富沢赤黄男、そして角川源義なども眠っている。

富安風生は「ホトトギス」の高浜虚子の高弟であり伝統俳句の旗手。富沢赤黄男は新興俳句の旗手とも言われている。昭和二二年に石田波郷、西東三鬼の提言で、「表現の自由を前提とする現代俳句の向上」を目指して結成されたのが現代俳句協会。やがて無季俳句と前衛俳句を認める派と伝統俳句を堅持する派との溝が大きくなり、正式に昭和三六年に分裂し、俳人協会が設立された。袂を分かつことになって、今に至るが、どうもその境界線が昨今曖昧となっている気がする。

以前偶々目にしたのだが、「俳句四季」八月号の筑紫磐井氏の「二つの協会」の記事。無論現代俳句協会と俳人協会の事。「俳人協会は、同人雑誌・無季俳句をあえて排除しない方針に転換している。」とあった。どうも、会員数の減少が背景にあるようだが。会員数減少はどれも深刻だ。そこには、

現代俳句協会の目的 この会は、現代俳句の向上を図ると共に、会員相互の親睦を深め、文化の興隆に寄与することを目的とする。（規約三条）

俳人協会の目的 この法人は俳句文芸の創造的發展とその普及を図り、もって我が国文化の向上に寄与することを目的とする（定款第四条）

目的で見ると二つの協会はあまり変わりがなく、伝統とか有季とか前衛の言葉など出てこない。

筑紫磐井氏のコメントには、「現に二つの協会に入会している人も多い。協会より会員の方が進歩的なのである。」と続いていた。対立する時代から協調する時代へ。

此処、小平霊園には流れの違う富安風生と富沢赤黄男が永眠しているのだ。二人の歩みを辿ってみたくなった。

■富安風生 明治一八年〜昭和五四年 数え九五歳没

愛知県に生まれ、東京帝国大学法学部に入學。吉岡禪寺洞に師事。通信省に入省。ホトトギスに投句し、高浜虚子の高弟と言われる。エリートコースを順風満帆に歩んでいた中、咯血。四年間の療養の後職場復帰。その時、自然を慈しむ気持ちちが芽生えたようだ。俳誌『若葉』主宰。虚子の風生観は「軽快で、典雅、極めて易々たるものの如く見える」。動脈硬化症、肺炎で没す。ホトトギス初入選句が、

鍛冶の火を浴びて四葩の静かな 風生（大正八年）
喜べばしきりに落つる木の実かな 風生（昭和七年）

この句は風生の代表句。この句に対して、ホトトギスを破門になったばかりの杉田久女が「喜べど木の実もおちず鐘涼し」と反発したらしい。園内の敷地半分程が樹木なので、秋の木の葉の降る風情が楽しめる。また、桜の名の付く通りが数か所あり、しだれ桜などの春の風情も捨てがたい。

まさなる空よりしだれざくらかな 風生（昭和二年）
一もとの姥子の宿の遅桜 風生（昭和五年）
蟻地獄寂寞として飢ゑにけり 風生（昭和二三年）
蹴上げたる鞠のごとくに春の月 風生（昭和三七）
ことされてな お邯鄲のうすみどり 風生（昭和四五年）
九十五齡とは後生極楽春の風 風生（昭和五四年）
晩年の夫婦のことを詠んで風生が墓碑に刻ませた句が、
走馬燈へだてなければ話なし 風生

■富沢赤黄男 明治三五年〜昭和三七年 五九歳没
新興俳句の担い手であり、新しい詩型を模索した。

蝶墜ちて大音響の結氷期 赤黄男（昭和一六年）

愛媛県に生まれ、早稲田大学経済学部卒業、『ホトトギス』に加わり、日野草城の『旗艦』創刊に加わる。戦争に二度応召し、中国大陸から前線俳人として投句した。昭和二二年現代俳句協会創立会員となる。高屋窓秋の赤黄男観は、「絵画的要素がきわめて強い。しかも戦火の中の行動に堪えて、彼の美意識は上り強靱に鍛えられていった。」吉祥寺にて癌で没す。

妻よ敷いて熱き味噌汁をこぼすなよ 赤黄男（昭和十年）
憂々とゆき憂々と征くばかり 赤黄男（昭和一二）
困憊の日輪をころがしてゐる傾斜 赤黄男（昭和一四年）
鶏頭のやうな手をあげ死んでゆけり 赤黄男（昭和一四年）
ひとの瞳の中の蟻蟻蟻蟻蟻 赤黄男（昭和一四年）
昭和一六年、戦地から娘に送った「ランプ」八句より三句。

落日に支那のランプのホヤを拭く
銃声がポツンポツンとあるランプ
灯をともし潤子のやうな小さいランプ

爛々と虎の眼に降る落葉 赤黄男（昭和一六年）
あはれこの瓦礫の都 冬の虹 赤黄男（昭和二一年）
切株はじいんじいと ひびくなり 赤黄男（昭和二三）
零の中 爪立ちをして哭いてゐる 赤黄男（昭和三六年）
伝統系の「ホトトギス」で活躍した俳人協会の富安風生。片や「ホトトギス」から分かれ、人間の内面を描こうとした現代俳句協会の富沢赤黄男。同じ霊園に眠り、彼の世で何を語らむ。何の柵もなく、ぶらっと小平霊園を共に吟行しているかも？

あけぼの集

晩年の閑居何より日向ぼこ東久留米青村 萌生
 頼んでもおらぬ正月また来たか八王子 赤野 四羽
 寒禽や朝の空気を震はせて国分寺 秋山ふみ子
 死せるかと見えて蠅螂髭立つる多 摩 足立喜美子
 蜜柑トロッコ青海原へ滑走す小 平安達 昌代
 その奥の烏瓜に愕される清 瀬 穴原 達治
 覚えなき腕の打身や日向ぼこ稲 城 新井 温子
 割烹着離さず勤労感謝の日八王子 荒川勢津子
 客迎う今年たのしき新居かな町 田 有坂 花野
 片面にポエジーのあり冬の壁 国分寺 安西 篤
 コスモスや小言幸兵衛聞けぬ耳 足 立 飯田 和子
 元気ならどうにかなるさしやばん玉東久留米飯田 玉記
 露寒や次々届く請求書多 摩 石川 春兎
 呵呵大笑の白寿の尼の白障子小 平 石橋いろり
 空き家のぼつりぼつりと冬の雨 練 馬 石原 俊彦
 末枯れ杖今日とてはずれガチャ八王子 市川 春蘭
 湯豆腐を掬う手許の覚束な青 梅 一ノ瀬順子
 山百態のことりとせぬ日記果つ 狛 江 伊東 類

霜の声海馬のちぢむ音かとも町 田 稲吉 豊
 硝子越し見上げる聖樹多摩のカフェ町 田 今田 述
 元旦や太平洋の日の出待つ町 田 宇賀いせを
 煮凝に名残の鱗ひかりけり武蔵野 内田 牧人
 平和祈念像の永遠の慈顔や冬暖か武蔵野 江中 真弓
 数え日のかなしみ稽古しておりぬ府 中 大井 恒行
 ハイヒール二足捨ててる日花カンナ日 野 大槻 正茂
 タぐれにつひの椿の花ことば立 川 大友 恭子
 寒中の夜景の底をサキソホン川 崎 大西 恵
 冬の川此処に生きとし生けるもの三 鷹 大森 敦夫
 除夜の鐘に余るウィルス禍飢餓いくさ昭 島 岡崎たかね
 寂聴逝く他界の「語り部」賑わいて武蔵野 岡崎 万寿
 しだいに白く冬山もわが脳も小金井 岡本 久一
 紅花の花芽残しつ勤労感謝日飯 塚 奥野 亜美
 童謡に灯油売り待つ冬の風 昭 島 尾関 英正
 あいまいに鎖くわたしねこじやらし稲 城 門野ミキ子
 菊薫るひと筆書きを抜ける風 西東京 金谷サダ子
 魂呼のごと山を呼ぶ冬はじめ日 野 亀津ひのとり

あけぼの集

冬薔薇や老女家の窓まだ開かぬ 西東京 河 順子
 本棚に自分史並べ冬ぬくし さいたま 河井 時子
 銀河が重く仰向けに寝られない 立 川 川島 一夫
 花鳥風月突破口は風だった太 田 川名つぎお
 ピカソ館の巨大プレート秋日燃ゆ 調 布 菅 さだを
 柚子風呂や五体をこする夫の声清 瀬 神崎 幸子
 しんしんと刃物の匂い寒月光小 平 城内 明子
 待つこともやさしさのうち秋の暮 武蔵野 高坂 栄子
 着ぶくれてとりあえず打つ生返事 西東京 幸村 睦子
 蓑虫やありのままとは超難問 府 中 小林 育子
 もう山へいかぬ背負子や冬に入る 町 田 小山 健介
 日の暮れを鬼が鉦打つ芒原 西東京 近藤 斗升
 月光の曲盲目のピアニスト多 摩 斉田 仁
 ひとつひとつパン包まれし小春かな 昭 島 坂本 空
 退屈を知らない猫と月仰ぐ 東久留米 佐々木克子
 黒海鼠の腹を裂かれて白状す 府 中 笹木 弘
 みづからを許す日の増え枯芙蓉 調 布 佐藤 茉
 余白には昨年の返事賀状書く 昭 島 佐藤 光子

冬支度押し入れに陽をたたみ込む 八王子 柴 れいこ
 波平のメガネの奥の秋思かな 杉 並 島 彩可
 早起き選挙帰りの十月桜 国分寺 島田 澄子
 雄叫びに歳は不問と初日の出足 利 清水 弘一
 平凡な日々こそよけれ冬紅葉 西東京 白尾 幸子
 食積のカマンベールチーズかな 調 布 白戸 麻奈
 つづれさせ妬心のごとく針光る 世田谷 鈴木 浮葉
 供花の水替えて安らぐ秋の声立 川 鈴木かずえ
 木枯一号北病棟に灯のともる小 平 鈴木 寿江
 極楽と母の口ぐせ柚子湯かな 小金井 鈴木 佑子
 夫と娘の連署冬の喪中がき 町 田 栖村 舞
 猫塚や秋の七草咲き乱る板 橋 諏訪部典子
 吉祥草隠れし花を見つけたり 東村山 瀬尾 恵澄
 聞かずとも察する齡春近し小 平 関 梓
 大寒や砂漠のキツネ耳ばかり 調 布 芹沢 愛子
 共倒れしそうで夫婦さくらんぼ 武蔵野 高野 公一
 術後三日魚のごとくに長き夜 西東京 高原 桐
 満天の星の孤独や桂郎忌 清 瀬 谷村 鯛夢

あけぼの集

ブロッコリーどこか変です家族です 国分寺 玉井 豊
 眉ラインコロナ下の冬みんな美人 稲 城 玉木 康博
 ラベルにはごまめの産地風ぎの海 日 野 玉木 祐
 公園の日暮は子らと彼岸花 東久留米 田村 實
 極月や兄の葬儀へ喪服干す 三 鷹 田山 光起
 馬は留守冬日に乾く馬 鹽 三 鷹 中條 千枝
 熱燗遡る枯れ木の天辺まで 八王子 辻 升人
 出番待つ役者は孤独石路の花 東村山 寺尾 令子
 見えぬ手に頭叩かれ三橋忌 立 川 遠山 陽子
 折紙に黙を折り込む冬 灯 西東京 戸川 晟
 玄関に手紙一通 朴 落 葉 杉 並 飛永百合子
 明日ありと思へぬ 齢 柿 紅 葉 相模原 鳥海 高志
 雲拾い雲捨ててゆく冬の月 清 瀬 永井 潮
 日面のベンチを占むる冬の鳩 町 田 長澤 義雄
 裸木に福音のごと星が飛ぶ 小 平 中條 啓子
 千人に千の天国 冬 紅 葉 西東京 中田とも子
 お年玉のコイン並べて咲く笑顔 国 立 中野 淑子
 我つつむ霧に重さはなかりけり 座 間 長野 保代
 大陸を過り今年の寒波来る 武蔵野 夏目 重美

エンディングノートは白紙年惜しむ 町 田 成戸 寿彦
 再会の友と笑顔の石路 日和 世田谷 西前 千恵
 短日やつげ義春の五六冊 昭 島 西村 智治
 雲の波抜き手を切つて望の月 多 摩 抜山 裕子
 温室の未だ青きやカカオの実 三 鷹 根岸 敏三
 じんじんと傷む天地や雁の列 三 鷹 根岸 操
 小鳥来るいつもの柿の木伐りました 小 平 野口 佐稔
 猪を追ふ銃声遠く丘あるき 八王子 野澤 勝美
 笑み羅漢諸手に小銭紅葉降る 青 梅 萩原 芙沙
 出がらしを注いで一服煤払い 武蔵野 蓮見 順子
 カタカナの崩れるように霜を踏む 武蔵野 蓮見 徳郎
 リハビリの自転車を漕ぐ赤トンボ 羽 村 花貫 寥
 晩学のスマホほろほろ冬木 立 多 摩 平山 道子
 柿田川迷ひ歩いて子持 鮎 鎌 倉 藤倉 頼江
 着ぶくれて後回しにす死支度 調 布 藤原はる美
 埋火に海苔焼く父の酌すなり 練 馬 淵田 芥門
 寒椿この終章を急がねば 八王子 冬木 喬
 拳骨の握手りんごの溢れる 駅 羽 村 堀部 節子
 冬菜にも作り手の色貸 農園 羽 村 堀部 嘉雄

あけぼの集

冬 磧水の青さにエピソード 国 立前田 弘
 竜の玉防犯カメラを探している 国 立前田 光枝
 無口なる穴まどい声帯萎縮症 木更津 松本 まり
 夫のなき部屋の広さや白障子 八王子 松元 峯子
 忘れられたような日々を着ぶくれて 東久留米 三池 泉
 引退の選手の背中 冬日向 東久留米 三池しみず
 老人の買ひ物姿 秋の雨 東久留米 三浦 禎三
 まくらべの昔話やもがり笛 小金井 三浦 土火
 ふるさとに無花果ほどの火種あり 世田谷 三浦 文子
 空蟬はたましいの枢マイナンバー 町 田 三木 冬子
 日の暮れや減りゆく命 冬すみれ 国分寺 水落 清子
 山眠る夜はむらさきのしじまかな 三 鷹 水野 星闇
 枯葉飛ぶ飛ぶトランプトアドリブ 日 野 満田 光生
 来し方を句帳に辿る 冬灯下 八王子 みどり
 動くとは生きていること 春の地震 昭 島 宮腰 秀子
 無言といういちばんの嘘 冬牡丹 調 布 宮崎 斗士
 大根を干して昭和がやわらかい 三 鷹 宮澤 雅子
 枯木立残 月白き正午かな 国分寺 武藤 幹
 返り花母はこの花好みおり 小金井 村井 一枝

冬の橋○か×かを決めかねて 武蔵野 望月 哲士
 薄氷は遠くより来る言葉かな 三 鷹 守谷 茂泰
 枯葉降る降るいちにちがすぐ終る 町 田 山崎せつ子
 夜は石に還る 石佛菰の花 東村山 山崎美紗緒
 羽子の音や在所の空に今もなお 府 中 山本 徳子
 幼児のはずむ背中 中に小春風 八王子 山本ひまわり
 万葉の径に香の立つ落葉かな 多 摩 山本みつし
 寂庵の主が逝きて冬に入る 調 布 豊 宣光
 三隣亡という日 渋谷は夕しぐれ 稲 城 好井 由江
 亡き人の去年の賀状と語りおり 三 鷹 吉川 真実
 雲の峰渚へつづく 馬決府 中 吉澤 利枝
 柿干して引き寄せ眺む 里の景 東大和 吉田雄飛子
 ジェンダーを学ぶ七十路 夜長し 東久留米 吉平たもつ
 凍て滝に細き一水意を通す 国 立 吉村春風子
 ウイルスの変異の続く世は 枯野 日 野 依田しず子
 包丁の切れ味 云云煮大根 立 川 米澤 久子
 緋の裳裾ちらと触れたり 鳥総松 青 梅 渡部 洋一
 ☆140号の作品に誤記がありましたので、次のように訂正させていただきます。
 弦として吹かれるからだ 芒原 調 布 芹沢 愛子

秋山ふみ子

アスファルトの時計じかけの油蟬

石橋いろり

地にころがっている蟬に触れて驚いたことがあります。急に弾け飛ぶ生命力に。「時計じかけ」という措辞がこの句の眼目でしょうか。かつて「時計じかけのオレンジ」という映画があり、それを彷彿とさせる深遠な意味があるのかも知れません。

安西 篤

固まつてあじさい色になる昭和

金谷サダ子

昭和時代を回顧すれば、かの疾風怒濤の時期も、遠く雨に煙るあじさい色に霞む。古き良き色合いや喜び哀しみの色合いも含み込みながら、作者の胸の中にしつとりと定着している。その固まりこそ、わが青春の七変化の思い出だろうか。

石橋いろり

弦として吹かれるからだ芒原

芹沢 愛子

「弦として」と表記すべきを、私の転記ミスで弓偏を落としてしまい「玄として」になってしまった。原句の「弦として」は、弦の音、身体の撓みが芒原と呼応し、芒原の情景と心象風景が際立つ。「弦として」とあらためてもう一度味わって頂きたい。

石原 俊彦

涼風の余白に凭れ熟睡す

佐々木克子

南北の窓が開け放たれた和座敷。涼風が吹き抜けては一時止む。座布団を枕にひと眠りと横になり、暫くは風の心地良さと止む間を感じていたが、その内熟睡してしまった。「涼風の余白に凭れ」という言葉の独特の上手さが心を打つ。

稲吉 豊

松茸やしめじのような妻と居て

内田 牧人

思わず微笑んでしまいました。松茸と比較されて浮かぶ瀬の無いような句ですが、捻りの効いた愛妻句と読みました。一時もてはやされる松茸に対し、しめじは一年中頑張っているし「匂い松茸、味しめじ」の言葉もありますから。

大友 恭子

高原のほのと明るき無月かな

玉木 祐

高原一帯が曇っていて月が見えない、陰暦八月十五日夜の月が見えないこと。月明かりのないのがかえって高原の広さを感じさせ、人生の来し方、行く末を思いおこさせる。月の季節が好きでいただきました。

大森 敦夫

スーパ^{をがら}ーの芋殻を焚きて功德積み

野澤 勝美

自分でも芋殻を焚く。買ってきた長い芋殻を焙烙皿に乗せて迎え火を消えるまで眺める。ご先祖様が帰って来ている感覚。そして数日後、静かに消えてゆく送り火。令和の東京で芋殻を売っているスーパーがあることに感謝したい。着眼点が好きな一句。

尾関 英正

新しき刻字を見つめ墓洗ふ

成戸 寿彦

新盆に身近な方の墓参りをされたのだらう。中七で故人への作者の強い思いが伝わってくる。命あるものの宿命と知りながら寂しさだけが去来する。「墓洗ふ」へと繋がる無常観が見事。静かに淡々と詠まれている分だけ、リアリティのある一句。

門野ミキ子

大いなる片陰として競技場

野口 佐稔

紆余曲折はあったけれども、東京五輪では数々のドラマの舞台となった国立競技場。無観客の開催ではあったが、木材が特徴的な大屋根と軒庇は炎天下の日射しを見事に遮ってくれた。これも片陰に違いない。二十一世紀の大いなる片陰である。

河井 時子

寂しいと言へぬさみしさ蟬が鳴く

藤原はる美

老いてゆく道筋で理由もなく寂しくなり口に出ることは私にもあります。でもそれを告げる相手がいないのが殊更さびしいのです。寂しさの自問自答です。賑やかに過ごした夏も終わりに近く、蟬の声も弱く単調になりました。散歩しましょうか。

神崎 幸子

だいじょうぶきんもくせいがおうから

三浦 土火

突然、味や匂いが分からなくなったら新型コロナウイルスに感染したのかも知れないと言われ、ワクチンを接種する前はとても心配でした。この「だいじょうぶ」は、庭の金木犀が二度も咲いたのを、匂いで知ったからです。次の変異株が怖いのです。

小林 育子

雲重くなって動かぬ

八月

坂山 裕子

八月の雲で原爆あるいは終戦を連想した。作者はふと空を見上げて、自身の戦争体験を思い起こしているのではないかな。重く動かぬ雲とは、まるで時が止まったよう。決して忘れてはならない八月を際立たせている。一字空けも想いの深さを増した。

小山 健介

八月の命のかかる千日手

戸川 晟

プロ棋士は、勝負に暑さは関係ないが、勝敗は命にかかわるものなのだろう。攻勢であったのに、手を変えねば連続手順の千日手。勝負を傍で眺めながら、核兵器開発合戦という千日手を止めるには、核兵器禁止条約をと思う評者である。

佐々木克子

白桃やどこから見ても母の顔

飛永百合子

白桃を手にしてつくづく眺める。少し紅みもある白い手触り。「あ、お母さんの顔にそっくり」そんなつぶやきまで聞こえてきそう。穏やかな母上のお顔と百合子さんが重なって浮かぶ。ぎすぎすした昨今、一瞬やさしい気持ちにさせてくれた句です。

清水 弘一

百日紅時に溺れてしまいいけり

大友 恭子

日本庭園では古刹の色に溶けいり、中国の中山公園では赤く栄華を懐かしむ。アルハンブラ宮殿では紫のドレスを鮮やかに纏う百日紅。時に溺れるのは歴史絵巻から現代の恭子さんの、花にも優る感性の豊かさであろうか。俳句にも益々妖艶さが漂う。

関 梓

大いなる片陰として競技場

野口 佐稔

戦後復興の五輪から半世紀、今回の東京五輪はこの国の疲弊を曝け出した。大きく切り抜かれた競技場の屋根は不気味に片陰を作り、負の遺産として私たちに迫る。五輪を機に多様性を認める社会への兆し等、句に込められたメッセージに同感しました。

芹沢 愛子

しずかなる額縁として夏は過ぐ

守谷 茂泰

無理に意味で読み解こうとするとすつと躲されるような、感覚で描かれた句。夏という額縁に置き去りにされた私を、秋という額縁が待っている。色づいた木の実も木の葉も私の額縁。季節への繊細な感受に作者の独特な個性を感じました。

高野 公一

高原のほのと明るき無月かな

玉木 祐

難しい言葉はなく解釈に立ち止まることもない。一読景が見える。無月のこの繊細な光を感じる高原の景色はこの世とも思われない美しさだ。一句一章黄金を打ち延べたように言い止めた。長い年月の修煉が報われた一句である。

玉木 康博

町中を洗い上げたる大夕立

一ノ瀬順子

本当にスコールのような夕立が増えました。「洗い上げたる」とくっきり町並み、そして青い空も見えます。青梅の夕立は、きつと町の向こうの多摩の山並みも洗い上げ、青い緑になっています。

戸川 晟

好物は堅焼煎餅敬老日

米澤 久子

そう、齒の丈夫な頃は堅焼の煎餅をばりばりと音を立てて食べたものだ。お気に入りには草加煎餅かな。あの醤油味が良い。敬老の日とか言つて人を老人扱いするけれど、私はまだまだ若い。好物は堅焼煎餅なんだから。ちよつと粋がつて格好取つたかな。

飛永百合子

敗荷に落ちる夕日の沼あかり

河井 時子

敗荷を見ると戦国時代の戦場跡が目に見える。途中で折れている茎は弓矢が折れているように見える。しかし夕日はその頑張りを称えるように水面を赤く染めている。その水面下では来年の花を咲かせる為に人知れず力を蓄えているのである。

永井 潮

枝豆のうるりと舌へ滑りこむ

赤野 四羽

さらさら、つるつる、ちらちら、などの重音の片方を「り」に変えて凝縮した言葉は沢山あるが、潤むから派生したうるるをもじった「うるり」は作者の創作ではないか。莢から押し出され舌へ落ち口の中であそばれる枝豆の肢体が目につく。

夏目 重美

レジスタンスミャンマー白シャツに汗と血

大井 恒行

戦後日本の不確かな平和、長きにわたる日常の平穏は、この事さえも忘れさせる。白泉は、「戦争が廊下の奥に立つてゐた」と弾圧と戦火の日常を詠んだ。掲句は、新たな時代に新たな方法でレジスタンスを展開するミャンマーの人々への賛歌である。

西前 千恵

敗荷に落ちる夕日の沼あかり

河井 時子

蓮の花が一杯咲いていた沼に、夏も過ぎ去り、傷ついた葉ばかりの蓮が夕日に照らされ静かに息づいている沼の景が目に見えます。コロナ下の昨今、ゆつくり花を見られなかった残念さと思われれます。一日も早く日常に戻らん事を祈るのみです。

抜山 裕子

アスファルトの時計じかけの油蟬

石橋いろり

炎天下のアスファルト道路に油蟬がコロコロと転がっている。蟬も熱射病で斃れたかと近づいて見ると、突然ジージーバタバタとゼンマイ仕掛けのように暴れ出す。蟬は人を騙すのです。猛暑の一角がよく見えてきます。

根岸 敏三

金剛の杭となるまで日輪草

安達 昌代

日輪草は向日葵のこと。我が家の庭にも毎年植えてその逞しさに元気を貰っている。しつかりと根を張った日輪草は、咲き終つて花は枯れても、抜かない限り太い茎は立ち尽くしている。作者がその茎に注目して「金剛の杭」と捉えたことが素晴らしい。

根岸 操

子規庵のガラス戸越しの秋澄めり

夏目 重美

正岡子規に心を寄せた句。子規の生きた時代は、どの家も明り障子だったが、高浜虚子がガラス障子に取り替えた。病床からの世界が広がり庭の草花を眺め、季節の移ろいを感じることも出来た。中七「ガラス戸越しの」が子規の生き様を物語っている。

野口 佐穂

裏口を確かめて蛇穴に入る

前田 弘

蛇の世界も大変ですね。予想もしない天敵や自然災害、気候変動などで裏口を確かめなければ冬眠もできません。「裏口」が人間臭く諧謔的です。蛇穴に裏口があるなんて初めて知りました。もちろん、句は人間社会のいまを見つめています。

蓮見 徳郎

だいじょうぶきんもくせいがおうから

三浦 土火

金木犀の強い匂を嫌う人もいるが、強いがゆえに力があり、あたりに存在感を示して余すところがない。大丈夫あなただのいる場所はここにありますが、と寄り添ってくれる。ひらがなの一文字一文字が語りかけにくれる。

前田 光枝

介護とは空欄埋めること夜長

宮崎 斗士

介護を受ける側、介護する側24時間をどう組み立てるかが長く介護をしてゆく秘訣。空欄を埋めるとはい距離を保っておられるんですね。老いて生きて行くには避けて通れぬそれぞれの夜長がある。どう介護してもらおうかという側に迫っている。

松元 峯子

しずかなる額縁として夏は過ぐ

守谷 茂泰

壁に掛かった、絵のない額縁がひっそりとある。いつもならその画布には、緑溢れる山々や灼熱の夏の海、野に遊ぶ子ども達の姿などが描かれるのであろう。コロナ禍の夏は何も描くことが出来なかった。言い知れぬ虚無感、寂寥感の暗喩だろうか。

三浦 土火

霊園の草のそよぎや秋日傘

秋山ふみ子

夏草もいつしか秋の風情に。その草がそよいでいるという。「秋日傘」の幹旋が深い抒情を醸し出す。好天の初秋に、和服の女性が白い日傘を差し、夫であった新仏の弔いにも来たのかもしれない。

宮腰 秀子

豊の秋病院食を書く句帳

小山 健介

俳句を始めて気づいたことの一つにメモを取るものが習慣になった。この句は明らかに病院での句と思う。気づくと何時ものように何の荷いもなくベッドの上でメモっている。退院したら病院食で一句、そう思っていたのだろうか。さすが俳人である。

宮崎 斗士

弦として吹かれるからだ芒原

芹沢 愛子

前号では上五「玄として」と間違っ表記されていた。まさに風が自らの体を「奏でる」ようなひととき。その音色が訴えているのはおそらく主人公の今現在の心境。孤独感か、はたまた漂泊感か……。芒原独特の寂寥が際立つ一句だった。

山本ひまわり

八月やMRIの硬枕

市川 春蘭

「硬枕」に心より共感。白い部屋の白い機械の中で硬い台に乗った時の、あの心細さを思い出した。技術の進歩は凄く有難い。三十分程で胸の血管の立体画像を撮った。機械音だけの中で思った。知らないままで「寿命です」でもいいかなと。

吉村春風子

大花野親なし子なし仕事なし

鈴木 佑子

この句は正しくコロナ禍における現代を象徴する句とも言える。親・子・仕事は何れも人生の糧として大切なものである。岸田内閣の喫緊の課題は、成長と分配のバランスの舵を如何に取るかである。季語の「大花野」に救われる思いである。

第39回 東京多摩地区現代俳句協会 俳句大会

新型コロナウイルス感染拡大のため、はじめて中止となった昨年の第38回大会に続き、今年も開催が危ぶまれましたが、従来とは違った形態で何とか実施にこぎつけました。

武蔵野スイングホールでの集会は取りやめ、記念講演も行わないというかつてなかった方法が取られました。当会の特徴である投句者全員による互選と特別選者による選を経て大会賞、入賞、選者特選賞が別項の通り決まりました。

俳句大会 入賞作品

〈大会賞〉

磨ぎ汁をゆつくり流す敗戦忌

平山 道子

〈入賞作品〉

保育所に灯る一室ちろ虫 みどり
秋の灯の一つに帰る杖の音 下田 峰雄
蛸や鼈甲飴が透きとおる 高野 公一

縄文の雨の匂ひに蓮ひらく	永井 潮
旧姓に戻りましたとサン格拉斯	関戸 信治
空蟬や誰も戻つて来ない道	國分 三徳
少年は脱皮の途中春休み	秋山ふみ子
抽斗から取り出す翼星月夜	杉本青三郎
やさしさを形にすれば秋桜	佐々木克子
未亡人とはひどい言葉ね沙羅の花	松元 峯子
銀河垂る高梁畑逃げ来し夜	満田 光生
切手でも買ひに出やうか更衣	稲吉 豊
マスクして人をおそれて夏果てる	戸川 晟
鶏頭の赤心中村哲逝きぬ	夏目 重美
一枚の空に鰯が群れている	依田しず子
新刊の帯がするりと長き夜	水落 清子
豆ごはんいい一日の予感して	原田恵津子
玉簾父の顔して来る息子	西前 千恵
沖繩忌十三歳の朗読詩	岩下三香子
熱帯夜古い輪ゴムの顔でいる	高木 暢夫
立葵きりと今日が動き出す	山崎せつ子
母訪へば灯さぬ門の虫の声	淵田 芥門
繋ぐ手のある安心の夕焼	飛永百合子
あんなにも咲きこんなにも落椿	成戸 寿彦
人形も筆箱もセルロイド	夏 吉田 典子
花菜風翼が生えそうで猫背	なつはづき
風は秋福耳に触れさせてやる	田口 武
タリバンも月の光に眠るらん	加藤 佑子
木戸銭は仮想通貨や村芝居	川崎 果連

〈大会選者の特選句〉

山本 敏倅 選

生身魂いちばん低い場所にいる 川崎 果連

並木 邑人 選

鶏頭の赤心中村哲逝きぬ 夏目 重美

安西 篤 選

磨ぎ汁をゆつくり流す敗戦忌 平山 道子

前田 弘 選

切手でも買ひに出やうか更衣 稲吉 豊

金谷サダ子 選

風鈴鳴る人の気配の無い町に 宮腰 秀子

津沢マサ子 選

この世からはみだしている曼珠沙華 佐々木克子

遠山 陽子 選

人形も筆箱もセルロイド 夏 吉田 典子

冬木 喬 選

マスクして人をおそれて夏果てる 戸川 晟

三池 泉 選
貰い鳴きする蟬もいてあの日くる 永井 潮

三浦 土火 選
衣食住足りて蓑虫独居中 原田恵津子

江中 真弓 選
少年は脱皮の途中春休み 秋山ふみ子

高野 公一 選
サスペンスドラマみたいなかき氷 島田 啓子

吉村春風子 選
繋ぐ手のある安心の大夕焼 飛永百合子

根岸 敏三 選
菊人形疲れ見せたる殿の肩 成戸 寿彦

永井 潮 選
たをやぎの牡鹿の瞳神事終ゆ 夏目 重美

山崎せつ子 選
この世からはみだしている曼珠沙華 佐々木克子

戸川 晟 選
みんなにせかされていて無職なり 関戸 信治

小山 健介 選
片蔭を辿り仏教伝来す 國分 三徳

大友 恭子 選
あんなにも咲きこんなにも落椿 成戸 寿彦

根岸 操 選
新刊の帯がするりと長き夜 水落 清子

蓮見 徳郎 選
蛸や鼈甲飴が透きとおる 高野 公一

水野 星闇 選
遙かなるムー大陸から土用波 古田 亨

佐々木克子 選
秋の灯の一つに帰る杖の音 下田 峰雄

石橋いろり 選
母訪へば灯さぬ門の虫の声 淵田 芥門

大森 敦夫 選
庭下駄の焦げんばかりや立葵 原田恵津子

現代俳句「列島春秋」2021年 掲載句紹介

現代俳句協会の月刊誌「現代俳句」が毎月「列島春秋」——地区別現代俳句歳時記——として掲載した当地区の作品を紹介します。

- 1月 大根やしみじみ母性ある白さ 鈴木 浮葉
- 2月 ふくふくと命生まれる春の土 松元 峯子
- 3月 春眠のつづきに母のゐるやうな 江中 真弓
- 4月 ちる花や縄文土器に蓋のなく 遠山 陽子
- 5月 そつと歩いて大地は産気づいている 蓮見 順子
- 6月 欲しきもの年ごとに減り茄子を植う 永井 潮
- 7月 片蔭に先住権のやうなもの 稲吉 豊
- 8月 八月や何もなかつたやうに海 中村ゆき子
- 9月 武甲山いつか平らに鳥渡る 亀津ひのとり
- 10月 記憶の川削ぎ取ってゆく野分かな 抜山 裕子
- 11月 枯れ落葉舞い込むように欠礼来 野口 佐稔
- 12月 霜の夜や母の肌着に名札縫ふ 淵田 芥門

あけぼの便り

○NHKテレビの「プラタモリ」に嵌っています。街歩きしながら歴史の有名なロケーションを地理的、地質学的に検証していく番組。それぞれの回がシリーズで出版されていて、再放送と合わせ二度美味しく感じられます。断捨離に逆行しないよう専ら図書館で借りています。

（石橋いろり）

○内田牧人様、清水万ゆ子様、前号で拙句を深く鑑賞して頂きありがとうございます。もう令和四年です。今年も俳句が詠めるよう健康に注意して一人暮らしを楽しくして行きたいと思っています。

（二ノ瀬順子）

○中野淑子様、拙句「山百合や溪流沿いの散歩道」を鑑賞していただきありがとうございます。散歩していききれいな花を見つけるとすぐ得した気持ち、良い気持ちになります。中野さんのいいねいな鑑賞が嬉しくとても元氣になりました。

（大槻正茂）

○「あんなにも咲きこんなにも落椿・成戸寿彦」椿の落ちる音は聞いたことがあります。大好きな花への賛美でした。大

会で特選に頂きました。（大友恭子）

○コロナ自粛、禁足もようやく弛み少しは気分もほぐれる頃になりました。近所の公民館句会も再開。毎日多摩俳壇も対面句会となりました。編集の皆さまいつもご苦勞様です。（亀津ひのと）

○私の句集『人地球』残部少々あります。ご希望の方は住所をお知らせ下さい。（立川市柏町三ノ五二ノ二一〇一）川島一夫宛

○新型コロナ禍、第六波くるか。この所、一日五〇〇人、三〇〇〇人単位の日本だが、イギリスは一人を越す毎日。どういう感染なのか。なおマスクを。

（川名つぎお）

○三浦禎三様には拙句を取り上げて頂き感謝。励みになります。三浦さまも果樹酒を作られたのかしら？ 時はすぐに過ぎ出来上がりも早いです。コロナの火種にオミクロン株も油断は出来ません。健康で俳句を続けられるよう、がんばりましょう。ありがとうございます。

（神崎幸子）

○退屈なのかといえばそうでもない。やることは山ほどあるのにただぼんやりしているだけ。月はいつ見ても心が慰められます。そんな毎日をすごしています。

（佐々木克子）

○お世話になります。句作りには日々苦勞をしております。何か楽しい経験をしたと思います。（島田澄子）

○足利市政百周年記念事業の一環として日本音楽の源流「声明と太鼓」のコンサートを鑑賞しました。令和四年一月は「管弦と舞楽」で宮廷文化の世界に触れる予定です。千年を超えて受け継がれる雅楽は、世界最古のオーケストラと言われます。皆様は昭和と平成生まれですが、この年号の典故をご存じでしょうか？ 南宋の「書経」から採られております。明治と大正の方が居られましたら「易経」です。令和は万葉集の序文からと報道されましたが、「文選」に見ることが出来ます。全て足利学校遺跡図書館の書籍（国宝）から採られております。大化から令和まで248の元号の八割は足利学校の書籍からです。夏目漱石が足利学校で「たのもしき梅の足利文庫かな」と詠んでおります。

（清水弘一）

○はじめて参加致します。多忙な日常や病に、気づかずにいたのですが多摩は地元で心の故里です。句を通してお仲間におせて頂くと大変有りがたく、よろしくお願いたします。（高原桐）

○手品のように、このところのコロナ罹患率が減り驚いています、ヨーロッパのように寒くなるとぶり返しがあるかと、いつまでも不安な気分です。どうぞ皆様お元気で。

(玉木祐)

○八十五歳のいじわるバアさんになりましたが、頭だけは冴えているつもりです。今日も文化祭で語り部として東村山市の民話「カッパの詫び状」を語り好評でした。でも歩行が上手く行かず困って居ります。「転ばぬ先の杖」、皆さんも一歩一歩に気をつけて下さい。今は歩ける人が羨ましい。

(寺尾令子)

○11月19日の月食はちょうどその時間帯に雲が広がり見る事ができず残念でした。十一月の俳句研究会は久しぶりに皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

(飛永百合子)

○コロナ禍で自粛生活の長期化により、俳句の詠み方も実景に想像という要素を加えて詠むことが増えてきたように思います。季節の風景や自然美に対する感動に想像の世界を読むことも俳句の楽しみ方であるように思います。

(長澤義雄)

○亀津ひのとり様、前号で拙句をお取り上げ下さいまして心よりお礼申し上げます。又、大変な知識をお授けくださり

有難うございました。思わぬ収穫と喜びも一入です。イカロスは太陽に向かって行ったので、羽根が溶けてしまいました。が、天の川の上でしたら自由に楽しめるのでは。八十代ならではの夢です。

(中田とも子)

○コロナ禍での第39回俳句大会の開催、関係者の皆様にお礼申し上げます。そして望外にも拙句が入賞させていただきました。参加者が例年の半分程であったためとは承知していますが、それでも励みになります。有り難うございました。

(成戸寿彦)

○コロナ感染者も大分少なくなって今頃少しほっとして、恐る恐る電車にも乗り久方ぶりの外出もしております。でも、外国ではまた感染の数も増えてまだまだ用心が必要なんですね。早く自由に外出したいです。

(西前千恵)

○山崎せつ子様、拙句に心に沁み入るご鑑賞を頂きましてありがとうございます。時間を大切にして句作に励みたいと思います。

(抜山裕子)

○いつもの散歩コースの川に翡翠がいます。歩くのがとても楽しみです。

(根岸敏三)

○佐々木克子様、飛永百合子様、前号の拙

句にご鑑賞をいただきありがとうございます。コロナが収束し、皆さんの声を聞き顔が見える句会を楽しみにしています。

(根岸 操)

○毎号「あけぼの集」をレ点をつけながら鑑賞しています。十一月末に「オミクロン株」が発生、やっと下火になった感染がまたどうなるか心配しています。

(野口佐穂)

○総選挙も終わり、そろそろコロナ禍を最終させて下さい。句会を盛んに出来ますように。

(花貫夢)

○三浦土火様、渡部洋一様、拙句に共感して下さってありがとうございます。大学のサークル活動を終えて飛び乗る松本行きの中央線の夜汽車、新宿から甲府までいつも楽しい時間でした。

(藤原はる美)

○「わたしには家族がいまないので：ひとり静かに死んで。ある日、亡くなっているのを発見されたら、それを『孤独死』とは呼ばれたくない」(上野千鶴子著「在宅ひとり死のススメ」より)。一方、人間は否応なく社会の一員であってひとり座敷で静かに死んだまま、土に還っておしまい、というわけには参りません。後の始末に他人が関わらざるを得ないの

も事実である。

(淵田芥間)

○「ぼちぼち久しぶりに対面句会を楽しんでいます。このままく」と祈るばかりです。

(前田光枝)

○「あけぼの集」に参加させて頂き感謝。会報には出句控や穴あきの心配りも。すぐ紐に通し失くしません。優しさに触れ喜んでいきます。家ごもりばかりで声を出さない生活、声帯が異常をきたすようです。歌いましょう。皆様ご自愛ください。

(松本まり)

○「現代俳句」11月号の列島春秋欄に、野口佐稔様の「枯れ落葉舞い込むように欠礼来」が掲載されていました。「多摩のあけぼの」で鑑賞させて頂いたことを思い出し嬉しくなりました。

(三木冬子)

○ようやく対面で句会ができるようになりましたが、まだまだ出席に慎重な方が多いです。早く句会の盛況が戻ってくるのを願うばかりです。

(満田光生)

○コロナ禍の中、多摩現俳においても多くの困難のあった昨今でしたね。役員の皆様のご苦勞心より感謝申し上げます。

(宮腰秀子)

○この二年コロナ禍のせいで句会もほとんどが通信句会となってしまった。今年こ

そ人と人が出逢いながらの「句会」復活を願いたい。

(武藤 幹)

○編集部の皆様にはいつもお世話になっております。どうぞお身体に気をつけてお仕事を続けてください。

(山崎美紗緒)

○やつとコロナも少し落ち着きはじめてたと思いましたが、自分の体調が悪く、そろそろ隠居どきかと思うこのごろ、九十才が間近かです。

(吉澤利枝)

○住所電話番号が変わりました。よろしくお願い致します。〒190-0033立川市一番町二二七-三九 米澤久子 電話〇四二・八〇六・二五五八

○本号の一句鑑賞へ原稿を賜りました皆様には心より感謝致しております。通常は事務局から書面で依頼のお願いでしたが、今回それが叶わなかった理由はひとえに私に起因するものです。編集長をはじめ事務局の奮闘で発行日に漕ぎつめました。「あけぼの」の温かい連帯感に感謝します。世の中事件・事故の原因を探れば小さな歯車が作動しなかった事もあるようです。広報担当の小さな歯車の私は心しております。

(関 梓)

高野公一さん「新潟出版文化賞」受賞

新潟に関する優れた出版物に対して顕彰する第13回「新潟出版文化賞」の文芸部門に、高野公一さんの「芭蕉の天地「奥のほそ道」のその奥」が受賞しました。選考委員の藤沢周さんは、「資料の深い読み込みとともに、松尾芭蕉が「奥の細道」を著わした内実に迫り、俳人の意識の底まで降りた。なにゆえ芭蕉が越後における叙述を空白にしたのかを解く筆致は圧巻。至高の「不易流行」を求めた芭蕉文学の在処を探る著者の思考の源には、やはりキーンが愛したような新潟人の情熱があっただろう。宇宙大に開かれた芭蕉像は、俳句を超えて文学表現の新たな可能性を示唆するのだ。」と評しています。

令和四年度定時総会・陽春句会

新型コロナウイルスの影響で二年続けて開催できなかった定時総会と陽春句会を次の日程で開催することになりました。

日時 令和4年4月9日(土)

会場 武蔵野スイングホール

(武蔵境駅北口2分)

陽春句会(選者選) 会費 一〇〇〇円
投句締め切り 3月5日

第11回 俳句研究会

11月27日（土）立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三、秋山ふみ子、

佐々木克子、水野星闇、

大森敦夫、山本ひまわり、

根岸 操

参加者28名

★講話 富山ゆたか氏 「写真と俳句」

人におくれ歩くたのしさ落葉路 佐々木克子
生き足らぬ者のにぎはひ冬の街 富山ゆたか
日に当てるだけの神輿を引き出せり 永井 潮
何するも先ずひとり言冬に入る 石原 俊彦
沖合は今日も白浪大根干す 三浦 土火
出合ひより別れが多し枇杷の花 越前 春生
瞬いてともる街灯雪催 稲吉 豊
追伸の余白に友の秋意あり 飯田 玉記
虚飾なき冬木が好きとなる齡 吉村春風子
秋高し父の遺品の二眼レフ 前田 弘
才媛の素顔ののぞく焼鳥屋 亀津ひのとり
久しぶり会えばそのまま冬日和 戸川 晟
湯豆腐や断酒の日々の箸重し 根岸 敏三
枯葉降る降るいちにちがすぐ終る 山崎せつ子
平凡な日々こそよけれ冬紅葉 白尾 幸子
あらあなた着いたらしいわ冬銀河 大槻 正茂
小春日にリボンをかけて送ろうか 水落 清子
返事した順から選ぶラ・フランス 飛永百合子

第12回 俳句研究会

丹前に巻かれ畳に転がりぬ 大森 敦夫
一茶の忌消息を追う勇氣なく 前田 光枝
フルートの疾走枯葉舞ひ上がる 満田 光生
小春日や家族総出の庭じまい 河井 時子
蛇穴に入る再起動してゐたる 根岸 操
太陽のはむら溶けだす夕しぐれ 長澤 義雄
断捨離とはさびしき言葉冬の月 秋山ふみ子
信楽の狸腹より濡れそぼつ 山本ひまわり
秋冷や手水に映る己が貌 淵田 芥門
地震ふかく過ぎて広野は冬の闇 水野 星闇

十二月の俳句研究会は会場の予約に手違いがあつて使用できず、流会となりました。当日来場された方と在宅句会に投句された方に一句を提出していただきました。十二月俳句研究会出句（選はなく順不同です）

一陽の嘉節待たる縁の椅子 大森 敦夫
龍の玉生命線のうへに置く 越前 春生
美しき老い枯れ枝に花ひとつ 永井 潮
冬の空明日も見える埴輪の目 水落 清子
冬眠り刃紋を凝視時止まる 玉木 康博
あるがままに禅堂前の冬木立 戸川 晟
年惜しみ妻にも盃を勧めけり 淵田 芥門
冬ざるものの中に風の音 吉村春風子

オミクロン株で予定変更

冬晴れや母より高齢三姉妹 西前 千恵
包丁のためらう一瞬葱の艶 石原 俊彦
天平の薨のようなおでんかな 高野 公一
風花やいつも私の背後から 前田 光枝
定位置に先客のあり冬桜 前田 弘
極小も混じりて夫の赤蕪菁^{あかから} 山本ひまわり
役了へてまた違ふ役冬木の芽 根岸 操
寒き夜の父の鉄筆波となり 石橋いろり
山の端の炎となりし時雨雲 長澤 義雄
極月の俎の傷胸の傷 佐々木克子
紅葉散つて一葉まとわぬ大樹かな 松元 峯子
指先に綿虫乗せて考える 宮腰 秀子
冬青空旅をしているちぎれ雲 飛永百合子
十二月時間まつすぐ逃げていく 山崎せつ子
羅漢らのさざめく声や木の葉雨 秋山ふみ子
毎日が何かの期限山茶花散る 稲吉 豊
かなしみの水脈あり冬の夜の雨 水野 星闇
寸秒の光もらさぬ冬木の芽 根岸 敏三
ドラえもんの道具にマスク小春風 小山 健介
佗助や鈍りし五感歳なれば 飯田 玉記

新型コロナウイルスのオミクロン株による感染が東京で急拡大し、第6波の恐れが現実になってきました。このため予定していた俳句研究会は一月の第1回と二月の第2回を中止することといたします。

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★令和4年度定時総会 並びに陽春俳句会

日時 令和4年4月9日(土) 午後2時
会場 武蔵野スイングホール
J R 武蔵野駅北口徒歩2分
(詳細は別紙をご覧ください)

★春の吟行会

令和4年5月に予定しておりますが新型コロナウイルスの収束状況により決定いたします。
詳細は次号でお知らせいたします。

★会員の現況(11月末現在)

248名(正会員204名・一般会員44名)
☆新入会員 2名(敬称略) *印は正会員
*津久井紀代(武蔵野市) *中矢 温(三鷹市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要)。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ・ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)
飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)
永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ ご案内 ◇◇◇◇◇ 俳句研究会

第2回 中止いたします

第3回 3月26日(土) 午後1時
立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分
(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・529・8682

*講話 日野 百草氏

第4回 4月23日(土) 午後1時
立川市子ども未来センター

*講話 水野 星間氏

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

＜在宅句会＞(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取り

ポイントとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19

蓮見 徳郎方「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆湾岸に林立する高層ビルの三十階に滞在した。煌めく地上の星が眼下に広がり、この浮遊感に鷹羽狩行のバセリの句を思い出しました。(梓)
☆ようやく対面句会が再開したが、私の結社の関東支部例会は半数が欠席投句。「座の文学」である俳句の危機は、まだまだ続く。(光)
☆今東京は銀杏の黄葉が美しい。黄落した葉を一枚二枚と回しながら二十枚程重ねてゆくとバラの花に。今我が家の棚を飾っている。(百)
☆コロナ禍の続く年末、来年はいいことがあるだろうか。気がかりだけれど頑張るしかない。いい俳句が沢山出来ることを願いながら。(せ)
☆一句鑑賞がいつもより少ないのは、前号の発送時の手違いで依頼書が届かなかったからです。締め切りを過ぎて急遽身近の方々にお願ひしたため、順番が変わったことをお許し頂き、お引き受け下さった皆様に感謝申し上げます。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和四年一月二十七日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-10-7

大森敦夫方

印刷所

株式会社 清水工房

TEL 090-9389-4821

FAX 0422-3010934

TEL 0422-62002626